

## 指標 4.6.1

### 指標名、ターゲット及びゴール

**指標 4.6.1** 実用的な(a)読み書き能力、(b)基本的計算能力において、少なくとも決まったレベルを達成した所定の年齢層の人口割合（性別ごと）

**ターゲット 4.6** 2030年までに、全ての若者及び大多数（男女ともに）の成人が、読み書き能力及び基本的計算能力を身に付けられるようにする。

**ゴール 4** 全ての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。

### 定義及び根拠

#### ○ 定義

本指標は、特定の年齢層において(a)読み書き能力、(b)基本的計算能力が一定の習熟度を超えた割合として定義される。日本においては、経済協力開発機構（OECD）が実施する国際成人力調査（PIAAC）に基づき、この調査の参加者のうち、(a)読解力、又は(b)数的思考力の習熟度レベル1以上の16～65歳の割合として定義される。

#### ○ 概念

①読解力の習熟度レベル1以上の者：PIAACの読解力調査の点数が176点以上の者を言う。OECDはこのレベルについて、「このレベルの問題のほとんどは回答者に対し、比較的短いデジタルテキスト又は印刷テキスト、連続型、非連続型又は混成型のテキストを読み、問題又は指示文で与えられた情報と全く同じか同義の、一つの情報を特定することを要求する。非連続型テキストを含む問題のように、文書の中に自分で情報を入力することを要求するものもある。競合する情報は、あったとしてもわずかしか存在しない。複数の情報を通した簡単な循環を要求する問題もある。センテンスの意味を決める基本的語彙を認識し、テキストの段落を読むための知識とスキルが期待される。」との見解を示している。なお、UNESCO Institute for Statistics が公表している「SDG 4 Data book Global Education Indicator 2018」及び「Country Profile」では、同レベル以上を「少なくとも決まったレベルを達成した」としているため、この基準を採用することとする。

②数的思考力の習熟度レベル1以上の者：PIAACの数的思考力調査の点数が176点以上の者を言う。OECDはこのレベルについて、「このレベルの問題は、解答者に対し、数学的な内容が明示されている一般的かつ具体的な状況で、基本的な数学的処理を要求する。わずかなテキストと最小限の誤った選択肢が存在する。この種の問題は、通常次のような単一のステップ又は単純な処理を要求する。

- ・ 個数を数えること
- ・ 並べること
- ・ 基本的な計算をすること
- ・ 「50%」のような簡単な百分率を理解すること
- ・ 単純な二次元表現や三次元表現で物を位置付けたり、物を特定したりすること。」との見解を示している。なお、UNESCO Institute for Statistics が公表している「SDG 4 Data book Global Education Indicator 2018」及び「Country Profile」では、同レベル以上を「少なくとも決まったレベルを達成した」としているため、この基準を採用することとする。

#### ○ 根拠及び解釈

本指標は、青少年と成人の読み書き能力及び基本的計算能力の機能的な習熟度を直接的に測るものであり、国連ハンドブックの当該指標のデータソース及び収集方法では、『OECDのPIAACは、本指標の良いデータソースである。』と定義されている。このため、PIAACの結果を用いて算出することとする。

本指標は、青少年と成人について、一定の習熟度を達成した者の割合を示す。

### データソース及び収集方法

PIAACは、成人を対象に、課題を見つけて考える力や、知識・情報を活用して課題を解決する力など、実社会で生きていく上での総合的な力（成人力）を評価する調査である。また、習熟度を適切に理解するため、回答者の属性を尋ねる背景調査も実施された。

調査は対象者の自宅等を調査員が訪問し、専用のコンピュータを使い1時間半から2時間程度かけて行う。ただし、第1回調査においては参加者がコンピュータに不慣れな場合は、紙媒体で調査を行った。

調査対象は、16歳以上65歳以下で、病院、介護施設、刑務所、軍の基地等の施設の居住者、海外転移者は目標母集団から除かれた。また、第1回調査においては日本では外国人及び不法滞在者は住民基本台帳に登録されていなかったため、標本抽出からは除かれた。

なお、第1回調査は調査期間が2011年8月～2012年2月だったため、東日本大震災の被災地（災害救助法の適用地域である岩手県、宮城県、福島県の全域、青森県、茨城県、栃木県、千葉県の一部）は調査地点から除かれた。

対象者（標本）は、各人が標本として選ばれる具体的な数値として計算できる確率抽出法が求められたため、日本では住民基本台帳を抽出枠とし、層化二段抽出方法により選ばれた。まず、全国の市町村を地域ブロック都市規模の組合せにより分割し、各層から調査地点となる町丁字を抽出（一段目）の上、町

丁字の住民の中から住民基本台帳を抽出枠として調査対象となる個人を抽出した（二段目）。

なお、未回答による偏りが生じないように調整が行われ、可能な限り偏りが補正されていることが国際的に確認された。

### 算出方法及びその他の方法論的考察

#### ○ 算出方法

この指標は、以下により計算される。

(a) 読解力：全年齢のレベル1以上の者の総数 a を、同じ年齢層の回答者総数 b で除し、その結果に 100 を乗じて算出される。

年齢 16～65 歳におけるレベル1以上の割合 c は、以下のように計算される。

$$c = \frac{a}{b} \times 100$$

(b) 数的思考力：全年齢のレベル1以上の者の総数 d を、同じ年齢層の回答者総数 e で除し、その結果に 100 を乗じて計算される。

年齢 16～65 歳におけるレベル1以上の割合 f は、以下のように計算される。

$$f = \frac{d}{e} \times 100$$

なおこの指標は、「OECD スキルズアウトルック 2013」を参照し、算出した。

#### ○ コメントと限界

- ・国連は、「読み書き能力及び基本的計算能力における若者と成人の習熟度を測定するには、何らかの直接的な評価が必要となる。世帯調査を使用して学習を測定することは、費用がかかり、管理が難しく、日常生活にとって重要な分野での学習を過小評価するかもしれないが、標準化されたアプローチでは評価するのが難しい。結果は、特に様々な背景のあるスキルを適用することに関して、青少年が知っていること及びできることを正確に表現できない場合がある。」との見解を示している。
- ・PIAAC では、書く能力を調査していないことに留意する必要がある。

- ・対象者が約 5,000 人であり、全数調査ではないことに留意する必要がある。
- ・PIAAC は 10 年周期で計画されており、本指標はこの間更新することができない。

## データの詳細集計

女性／男性

## 参考

国際成人力調査（日本語）

[https://www.nier.go.jp/04\\_kenkyu\\_annai/div03-shogai-piaac-pamph.html](https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-piaac-pamph.html)

国際成人力調査（英語）

<http://www.oecd.org/skills/piaac/>

## データ提供府省

文部科学省

## 関連政策府省

文部科学省

## 担当国際機関

ユネスコ統計研究所（UNESCO-UIS）